

小蝶物語

野口雨情

● 守り神様の巻

小蝶子之助が京ちやんと袂別をして、守り神様の御社へ歸つて参りました。

すると、子之助の親類の者や、友達共は何れも一の鳥居の前へ踞んで何にやら相談をして居るやうな様子でしたが、子之助の姿を見るより。

『やア、子之助さんちや無いか。』

『やア、子之助さんだ。』と心配から蘇生つた如な嬉しい顔をして一同が驅け寄つて参りました。

『皆さんに久し振りで御座いました。』と子之助が丁寧に辭儀を致しますと。

『私共は昨日歸つたのだが、子之助さんが歸ら

ないので、神様にお目通りが出来ないから、致方なしに昨夜は此處で夜を明したのです。』と一番大きな蝶が申しますと、その次ぎのが。

『いよ、子之助さんが、今日も歸つて来なかつたら、皆が手を分けて探しに出やうと相談を仕て居たのでした。』と言いますと残の一同も口を揃へて。

『何にしろ、達者で歸つて来たから宜かつた。』と喜ばしさうにつぶやきました。

子之助は鳥居の傍へ座りして、一同に心配かけたのを頻と謝りながら。

『私共早く歸つて皆さんに逢ひ申したいとは思ひましたが、春から此方いろくとお世話になつて居た、れ方がありましたので、その方に何んのお禮もせずにな別れ致すのが、何んとなく心咎

めに感じましたので、遂に遅なほりました次第です。』と、京ちやんに別れし南風の朝が如何に心細かつたかを思ひ浮んだのでせう。瞳孔は涙に濡されて、自ら愁の様子に現は

れて居ますので一同は不審さうに

『子之助さん、春から此方世話

になつた、ね方ツて何處のね方な

のだい。』と、聞かれましたので、

實は京ちやんと言ふ七歳になる兒

があつて、その京ちやんが自分の

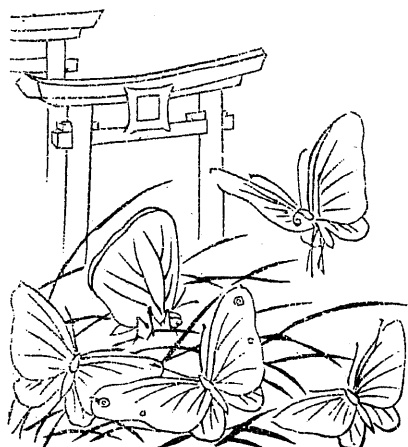
遊び友達と成つた事やら。雨で翼

を傷めた事やら、薔薇の花があつ

た事やら。草の葉へ引つ越した事やら。京ちやん

に別れた事やら。何にから斯にまで一々話します

ると一同も初めて。



『京ちやんと言ふ兒は、親切な慈悲深い、別段な兒だなり。』と感心して、賞めました。すると、大きい蝶が申しませるのには。

『京ちやんと言ふお方のご親切を、我々一同は感謝しなればなりません、ですが我々がお禮を致すよりも寧ろ神様にお願ひ申して神様からお禮をして戴いた方が好ではありますまいか。』と申しませると、

『その方が宜いでせう!』と

直ぐに一同が賛成をして、一の

鳥居二の鳥居、三の鳥居と順々にいって、御社

の前へ整然と並びました。

『お願ひ申します〜。』

の願ひ申します〜。』

『ハイイ。』と言つて、暫くすると、御社の扉がギーンと開かつて中から出て來ましたのは、奇麗な身の、透るほど薄い翼を持つて居る、紅蜻蛉でした。一同を見るより。

『これは、蝶々さまで、ムりますか、お珍らしいです。』

『ハイ、只今戻りました、何卒神様へお取次ぎを願ひます。』

『只今お歸りで、ムいますか、餘り皆さんがお歸りが無いので、神様も大層御心配をなすつて入らつしやいました。ご遠慮なく、此方へお這りなさい。』と言ふので、一同が、お宮の内へ這りますると、神様も大層御満足で、莞爾々々お喜びなすつて居ります。

『只今歸りまして、ムいます。』と蝶々一同が御前

へ平伏致しなすると。

『皆も達者で歸つて呉れて、何により嬉しい。さあ、是れから皆が春の野と夏の野で、何んな面白い事をして遊んだか、物語しなさい。』と言ふので、一番大きい蝶が、恐る／＼首を擡げまして、小蝶子之助が京ちゃんにお世話に成つた一仕始終を物語しますると、神様も非常に御感動なすつて直ぐに京ちゃんのお所へ、お使を遣りましたとさ。

(守り神様の巻をばり)

傲慢な男

小島松之助

一人の傲慢なる男がありまして、西瓜圃の傍にある榎の木の根に腰をかけて息みましたが、じつと上を見て、榎の實の結つてゐるのを眺めて、獨り